

市産食材で食を学ぶ 食のプロによる料理教室

「味覚のアトリエ」は10月20日、石森ふれあいセンターで開かれ、市内外から21人が参加しました。1990年にフランスで始まった味覚の教育活動「味覚の一週間」。日本では2011年から活動が始まり、全国各地でさまざまな取り組みが実施されています。その一環として、「フレンチ割烹ドミニク・コルビ」オーナーのドミニク・コルビ氏による料理教室「味覚のアトリエ」が本市で開催。参加した加藤静枝さん(44)＝追町江合＝は「あえて生のタマネギを入れて食感を出すなど、五感を意識した調理を学びました。カフェで料理を作っているの、参考にしたい」と感想を述べました。



参加者は市産食材をふんだんに使ったフランス料理から、味わうことの大切さや食べることの楽しさを学んでいました。

モノづくりへの挑戦 産業フェスに企業が集結

「第15回登米市産業フェスティバル」が10月6日、迫体育館と迫中江中央公園を会場に開かれ、約1万1千人の来場者でにぎわいました。体育館内には、電子部品や食品加工など、市内企業の製品が展示され、研究と挑戦を重ね続ける自社技術の紹介やデモンストレーションが披露されました。屋外では、市内の特産品やはっと、油麩井などの飲食コーナーが設けられ、来場者は舌鼓を打ちました。土田美貴さん(37)＝栗原市＝は「身近なものや最先端の技術が、登米市内に数多くあることに驚きました。未来に向けて発展し続けてほしいですね」と期待を込めていました。



村田製作所が開発したロボット「チアリーディング部」のかわいいうるさきに、来場者は終始目を奪われていました。

未来の登米市に向け 子供議会で中学生が議論

「子供議会2019」(とめ青年会議所など主催)は10月22日、市役所議場で開かれ、市内10校から選ばれた20人の中学生が議員となって、市長らと議論を交わしました。子供議員は「学生が学習に集中できる環境整備をしてほしい」「交流人口を増やすイベント作りが必要」など、普段の生活の中で感じていることを質問しました。議長を務めた古内琴さん＝中田中2年＝は「登米市をもっといいまちにしたいという気持ちを話すことができて、とてもいい経験になりました。これからは機会を見つけて、自分たちの意見を提言していきたいです」とまちづくりへの意識を新たにしていました。



「はい、議長」。挙手をして、議長から発言の許可を受ける子供議員。まちの未来のために、真剣に意見や要望を発言しました。

芭蕉の跡に思いはせ おくのほそ道の軌跡知る

「おくのほそ道ツアー」(浅水ふれあいセンター主催)は10月19日、登米市内で開かれ、12人の参加者が市内に残る松尾芭蕉行脚の軌跡をたどりました。参加者は、柳津虚空蔵尊や芭蕉一宿之跡など北上川沿いを中心に、芭蕉が巡った13カ所のスポットについて解説を聞きながら見学。この地に残る偉人の足跡に思いをはせながらツアーを堪能しました。大畑典子さん(67)＝中田町長谷＝は「昨年、おくの細道の本を読んで松尾芭蕉に興味を湧き、今回初めて参加しました。芭蕉のこと以外にも北上川などの地元の歴史がたくさん知れて勉強になりました」と話していました。



案内人を務めた酒井哲雄さんは「芭蕉がたどった歴史が登米にあることをたくさんの人に知ってほしい」と思いを語りました。

活性化と雇用に期待 企業誘致で工場立地協定

「牧野精工の登米市への立地に関する協定式」は10月29日、市消防防災センターで開かれ、市は県(鈴木秀人経済商工観光部長)と牧野精工(牧野洋一代表取締役社長)と新工場進出の立地協定を結びました。同社は、大阪府に本社を置き、建設機械などの油圧機器の部品を製造・販売する企業で、豊里町内の工場跡地を利用して東北へは初進出。協定書には、工場の改修や事務手続きの支援、地元の雇用配慮することなどの内容が盛り込まれています。熊谷盛廣市長は「県や関係機関と連携しながら支援していきたい。地域に根ざした企業として発展してほしい」と期待を寄せました。



牧野社長(中央)は「来年3月の操業予定で、高校生の採用も進んでいる。徐々に製造規模を拡大していきたい」と話しました。

会話と買い物楽しむ 東北最大佐沼秋のフリマ

「第23回佐沼秋のフリーマーケット」(登米中央商店会協同組合主催)は10月20日、迫中江中央公園などで開かれ、約3万5千人が来場しました。市内外から450のブースが出店。自衛隊や警察による体験コーナーや佐沼小・中学校による吹奏楽などが披露され、会場はにぎわいました。出店した高橋由紀子さん(68)＝追町鉄砲丁＝は「登米市を盛り上げようと、4月に女性たちによる『九重会』を結成し、その仲間たちと出店しました。フリマは会話しながら販売するのが楽しいですが、ほかのお店を回って買い物できるのも魅力ですね」と笑顔を見せていました。



来場者は懐かしい商品を見つけると、出店者と思い出話に花を咲かせていました。